

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

— 男君、女君の人生を彩る言葉として —

伊 勢 光

はじめに

本稿では『源氏物語』、特に『源氏物語』正編における「やつる」、「やつす」その他動詞である「やつす」という言葉について、考えたいと思う。

古くは『日本書紀』神代下（第十段）一書第三に見える言葉である（なお、今後、特に断りがない場合、作品本文とページ数は『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る）。

其の後に、火酢芹命、日に檻^か樓^{ろう}れて、憂へて曰さく、「我已に貧し」とまをす。乃ち弟に帰伏す。（『日本書紀』一七七頁）

兄である火酢芹命は、自分の釣り針を落とした弟を許せず対立する。しかし、海神の加護を得た弟に負けて日々貧しくなっていくという、いわゆる「海幸山幸」の話である。このように「零落する」という意味で使われてきた言葉であった。

本論はこの「やつる」「やつす」という語が、『源氏物語』内ではどのような意味、機能を持っているか考察するものである。

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

一 『伊勢物語』『うつほ物語』における用例

さて、先に「やつる」の初例として『日本書紀』の用例を見た。しかし、古くから用いられた言葉ではあったものの、物語において多用されたというわけでは必ずしもないようである。『伊勢物語』『竹取物語』ではそれぞれ一例ずつ、『うつほ物語』でも三例しか見られない。まずは『竹取物語』『伊勢物語』における用例を確認する。

つかはしし人は、夜昼待ちたまふに、年越ゆるまで、音もせず。心もとながりて、いと忍びて、ただ舍人二人、召継として、やつれたまひて、難波の辺におはしまして、問ひたまふことは、「大伴の大納言殿の人や。船に乗りて、龍殺して、そが頸の玉取れるとや聞く」（『竹取物語』四五頁）

むかし、ことなることなくて尼になれる人ありけり。かたちをやつしたれど、ものやゆかしかりけむ、賀茂の祭見にいでたりけるを、男、歌よみてやる。（『伊勢物語』二〇四頁）

『竹取物語』では、家臣がなかなか宝物を持ち帰らないので、しば

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

れを切らした大伴の大納言が自ら難波まで出向いて情報収集をするという場面で「やつし」が用いられている。政権の要人たる大納言が難波までそのまま下向するのは何かと具合が悪いので、変装し、お忍びで行ったという趣である。

他方、『伊勢物語』では「かたちをやつし」の形で、「女の出家」が表現されている。女は出家の身でありながら祭り見物に出かけて、そこで男に見つかり、歌を詠みかけられる。女はなびかない。「かたちをやつし」、「尼にな」っていることが原因であろう。ただ、「かたちをやつし」でも男を惹きつける魅力があることも分かる。

次に『うつほ物語』の三例も確認しておきたい。

秋の朝ぼらけに、玉と磨きしつらひたるところに、ことなる飾りもなくやつれ、なかなかなるさまなれど、いふよしなくもてはやされて、清げにたぐひなく見ゆるを、天女を率ておろしたると驚かれたまふ。(中略) 女は、年ごろにいみじうやつれぬらむと思ふに、いとまばゆきまで恥づかしきに、母をも子をもつくづくともりたまへば、『うつほ物語』俊蔭 一〇二—一〇三頁

零落して山籠もりしていた俊蔭女が兼雅の邸に引き取られる場面である。都を離れて長い彼女は周りから「やつれ」といると見られ、彼女自身も「いみじうやつれぬらむ」と恥づかしがっている。とはいえ、「清げでたぐひな」い美しさを持ち、兼雅からは「天女を率ておろしたる」と称賛されていることもまた事実である。

残りの一例も、山に籠って憔悴している女に用いられている。夫の源実忠に捨てられた妻が山に籠っている。実忠の兄である実正が、その様子を伺いに行った時の場面である。

かく不用にしなければまつりたまひつるはいかにぞ、とて隠れた

まひしかど、見たてまつりしかば、みなかたち人にこそは。年ごろ、さばかりものを思しつつ、服やつれたまへれど、さらぬ人にも多くまさりてなむ。(『国譲・中』一六五頁)

うまくいかない夫婦関係に憔悴していることに加えて、義理の父親の喪に服していることが「服やつれ」と形容される。そして、「やつれ」ではいるけれど、なお他の女性よりは魅力が「多くまさりて」というのである。

これらの『うつほ物語』の用例を見ると、「やつれ」は負の要素ではあるが、それは十分に他の魅力でカバーし得るもの、むしろその女性の隠し切れない美しさを浮き彫りにしさえするものとして使用されているように思える。

総合して考えれば、つまり「やつる」「やつす」は『伊勢物語』、『うつほ物語』では女性に、そして俗世から離れた女性の衰微した様子を表す語として用いられていると言えよう。と同時に「やつれ」ながらも、その「やつれ」では隠し切れない、女の美しさが立ち上ってくるという共通性も確認できたのではないか。

こうした『伊勢物語』『うつほ物語』の例に続いて、『源氏物語』ではどのように「やつる」「やつす」が用いられているのか。『伊勢物語』『うつほ物語』の用例と重なるのか、そうではないのか。それを次項以降、考えていきたい。

二 「やつる」「やつす」論のこれまでと、『夜の寝覚』への展開

前項では『竹取物語』、『伊勢物語』、『うつほ物語』における「やつる」「やつす」の全用例を確認した。全て合わせても五例を数えるのみだったわけだが、一方、『源氏物語』においては、それらの用例

は八一例という数に激増する。

いくら『源氏物語』が長編であるとはいえ、その使用回数は特筆に値すると言えよう。この点、神野藤昭夫が『源氏物語』がいかに「やつる」「やつす」という語を多用することによって、新たな表現世界を切り開いたかがこれだけでも推測される」と述べる通りである。この神野藤、そして小島繁一が着目するのが、折口信夫の言説であった。神野藤は、折口の「貴種流離譚」論を援用し、次のように述べる。

少なくともさすらう神の物語としての「貴種流離譚」の底には、神の「やつし」があったことを想定することができないのではない。神たるものが「やつす」ところに、逆に「やつし」姿に神性を認める心意が生まれてくるので、

「やつし」||「まれびと」||神

という図式が、「貴種流離譚」には隠されていると考えることができる。

そして小島は、特に夕顔と光源氏の関係から、「光源氏が「狩の御衣」をまとい「やつれ」ているということは、ある世界から別のある世界へ移行する呪性を獲得していることを意味するだろう」とした上で、次のように指摘する。

はなはだしい身分差という「境界」を越えるために光源氏の「やつし」があった。(中略)男が「やつし」てやってくるのは、男にとって異界に属する女と出会える交情の時空に入るための一つの儀礼なのである。

つまり、『伊勢物語』『うつほ物語』では主に女性の衰微や出家(その一方で、なお隠せない美しさがある)を描くことに用いられてきた

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

「やつる」「やつす」が、『源氏物語』では、「神の「やつし」」という論理から)男に「神性」を付与するものとして認識できたり、あるいは男が異界に属する女と出会うための「儀礼」「異装」として理解したりできるというのであった。そして、さらに興味深いことに、この「異装」としての「やつす」「やつる」は、後の『夜の寝覚』にも受け継がれていく。

例えば、男主人公がヒロイン中の君に会いに行く時、相当な頻度でこれらの言葉が用いられているのであった。

垣間見のしるべせし少納言、また親しくおぼす三人ばかり、わりなく忍びやつして、四月五六日のほどに、日うち暮るるほどに、京を出でたまひて、月もいとかすかに、道たどたどしきを、心のゆくにまかせて……

『夜の寝覚』巻一 一二九頁

雪の光も、月も、曇りなうさやかなるに、ことさらひきつくりひたることなうやつれたまひて、いみじう恨みしをれて、立ち出でたまふさまの、あさましう、あいなくと、せめて思ひ離れたてまつれど……

『夜の寝覚』巻二 二二五頁

おぼろに、をかくし澄める月影に、いみじくなまめかしく、なよびかにやつれたまひて、うち叩きたまふ。

『夜の寝覚』巻三 三四四頁

これまでも『夜の寝覚』の男主人公は光源氏の影響を受けて造形されていることはたびたび言われてきたが、この「やつし」の「異装」をして女のところに徹行している点も、まさに光源氏の後継者と言えるだろう。

つまり「やつる」「やつす」という語は、「異装」した男に「神性」

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

を付与し、「交情の空間」に入らせる機能がある（つまり男を色好みの主人公（ヒーロー）たらしめる機能がある）という見方は『夜の寢覚』にも当てはまるのだが、となれば『夜の寢覚』へも継承されていく『源氏物語』の「やつる」「やつす」の内実は、より詳らかに見ていく必要があるのではないか。『伊勢物語』『うつほ物語』に見られるような「やつる」「やつす」は果たして消えてしまったのか。

次項以降、『源氏物語』の「やつる」「やつす」の様々な用例を確認しながら、『源氏物語』における「やつる」「やつす」の実態を見ていきたいと思う。

三 女の出家を描く「やつす」——第二部世界以降の用例

先にも述べたように、『源氏物語』には全八一例、「やつる」「やつす」が用いられている。見ていくと、その中には『伊勢物語』で見られたような、出家を指す用例も少なくない。

以下、『源氏物語』における「やつる」「やつす」の中で、明らかに「出家」「髪を下ろす」を意味する用例をすべて挙げる。

- ① 恨みきこえたまへど、限りありて別れはてたまはむよりも、目の前にわが心とやつし棄てたまはむ御ありさまを見ては、さらに片時たふまじくのみ、惜しく悲しかるべければ
 『源氏物語』「若菜下」二二四頁
- ② また、いとあたらしう、あはれに、かばかり遠き御髪の生ひ先を、しかやつさむことも心苦しければ（柏木）三〇二頁
- ③ 世の中なべてはかなく厭ひ棄てまほしきことを聞こえかはしたまへど、なほやつしにくき御身のありさまどもなり。

（鈴虫）三九〇頁

- ④ ここにかく世を棄てたるに、三の宮の同じごと身をやつしたまへる、末なきやうに人の思ひ言ふも、棄てたる身には思ひ悩むべきにはあらねど、かならずさしも、やうのこととあらそひたまはむもうたてあるべし。
 （夕霧）四六〇頁

- ⑤ 「まことに言ふかひなくなりてはさせたまひて後の御髪ばかりをやつさせたまひても、ことなるかの世の御光ともならせたまはざらんものから、目の前の悲しびのみまさるやうにて、いかがはべるべからむ」と申したまひて（御法）五〇八頁

- ⑥ 事にふれて、わが身につがある心地するも、ただならずもの嘆かしくのみ思ひめぐらしつつ、宮もかく盛りの御容貌をやつしたまひて、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむきたまひけむ。
 （匂兵部卿）二四頁

- ⑦ 右大臣も、「めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり。故院だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮を得たてまつりたまひしか」
 （宿木）四七五頁

- ⑧ 「やついたまはんも、いとほしげなる御さまにこそ」など、いとおとなびてのたまへば、母君、いとうれしと思ひたり。
 （東屋）四九頁

- ⑨ ただこの御方のことを思ふゆゑにぞ、おのれも人々しくならまほしくおぼえける。まして、正身をなほはしくやつして

見むことは、いみじくあたらしい思ひなりぬ。

〔東屋〕五八頁

- ⑩ 「かかる御容貌やつしたまひて、悔いたまふな」など、尊きことども説き聞かせたまふ。
〔浮舟〕一四二頁

- ⑪ 法師といひながら、心もなく、たちまちにかたちをやつしてけること、と胸つぶれて、答へ聞こえんやう思ひまはさる。
〔夢浮橋〕三七五頁

以上、十一例の例を確認すると、『源氏物語』は『伊勢物語』から「やつす」の使い方を学び、継承したのだと思われる。光源氏の榮華を描く第一部〔桐壺〕～〔藤裏葉〕では一例も見当たらないのは、おそらく偶然ではあるまい。『源氏物語』も佳境に入り、いよいよ「女の生」という問題に焦点を当てるに際し、満を持して『伊勢物語』的な用い方をしたのではないかと思しい。女性九例、男性（朱雀院）一例、そして両性（源氏と秋好中宮）一例というその比率は、やはり「女性の出家」を描く言葉という「やつす」の特徴が如実に表れている。

まず分かるのは、女三宮や紫の上の出家が「やつす」という言葉で象られていくことだ。①で語られるのは紫の上の出家（「やつし」）を許さない光源氏の有り様である。自分の意志であっさり出家してしまつた（「やつし棄て」た）女三宮のことが彼の頭にある。それだけにいいいよ源氏は紫の上に執着するのである。女なくしては生きられない光源氏のある種の浅ましさを、そしてそんな光源氏からいち早く遁れた女三宮の決断が「やつし棄て」という語の裏にあるのではなからうか。また、②や⑥の用例からは、女三宮の出家が女盛りに（かつ光源氏からすれば唐突に）行われたものであり、周り（特に光源氏）が戸惑い、

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

無念さを感じたであろうことが透けて見える。女が自らの意思を表明する最終手段として出家があること、そしてそれが男を戸惑わせ、無念がらせるという構造を、女三宮の「やつし」は物語っている。

一方の⑤は、ようやく今わの際に紫の上を出家させようとした光源氏が「今さら出家させても仏の利益はないから」と夕霧に止められる文脈であるが、源氏に執着され、罪業を残して死にゆかねばならない、いわば「やつせ」ない紫の上の問題が浮き彫りになる場面と言えよう。このように『源氏物語』第二部以降において「やつす」という言葉が紫の上や女三宮を対象に用いられていたわけだが、宇治十帖（橋姫）～〔夢浮橋〕に入ってそのバトンを受け継ぐのが、浮舟である。立て続けに四例（⑧～⑪）用いられていることから、物語は「やつす」ヒロインとして何らかの問題意識を浮舟に背負わせたと考えられるだろう。

⑧、⑨では、出家させるのは惜しい浮舟の美貌、そしてその美貌を立身出世の道具に使いたい母（中将君）の思いが語られる。しかし、そのような母の思いとは裏腹に、浮舟は男女関係に悩み、出家を決意する。⑩は、その際の僧侶の「後悔してはいけませんよ」との念押しである。

その流れで特筆すべきは最後の⑪で、その出家を薫が恨み、浮舟の還俗を望む展開につながっていくことである。女三宮の出家を恨んだ光源氏と似ている。光源氏の未練にさらされながらも女三宮は出家を継続し続けることができた。浮舟はどうなるのか。彼女はいわばもう一人の女三宮であり、女三宮では描き切れなかった問題を浮舟が継承したと考えられよう。『源氏物語』の関心のありかが窺われる。

もう一点、この問題に付け加えておきたいのは、先にあげた『夜の寝覚』はこの点も『源氏物語』を継承しているということである。こちらはいよいよ物語が佳境に入った巻五（最終巻）の冒頭で「移ろひしほどなど、あふなう髪なども削ぎやつしてましかば……」（四三二

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

頁)と、早く出家しておけばよかったというヒロイン(寢覚の上)の思念が語られ、その後も何度も彼女の(果たせない)出家が「やつす」という言葉で描き出されていく。いわば、自分の意志で「やつし」を果たした『源氏物語』の女三宮や浮舟が寢覚の上の先達としており、女三宮らを通してみることでは出家できない寢覚の上の悲哀が「やつす」という言葉によって浮かび上がってくるという構図になっているのである。

話を『源氏物語』に戻せば、この『夜の寢覚』に与えた影響という点でも「出家」を指す用例の「やつす」には非常に重要なものがあるのだが、見てきたように見事に用例の分布が偏っている。繰り返すが「若菜上」巻以降、つまり(絶対的なヒーロー不在の)第二部世界以降にしか「出家」を指す用例はないのである。では、いったい第一部世界における「やつる」「やつす」はどういった使い方がされているのか。それに関しては次項で確認していきたい。

四 光源氏の人生を彩る「やつる」「やつす」

——第一部における用例

物語の順番としては前後するが、光源氏の栄華を語る第一部世界ではどのように「やつる」「やつす」が使われているか見ていきたい。

数からいえば、「やつる」二六例、「やつす」九例、名詞「やつれ(姿)」が六例、計四一例の用例を見出すことができる。そのうち光源氏に用いられている例が二四例であり、第一部世界の「やつる」「やつす」の半分以上が光源氏に用いられていることになる。この辺り、先の神野藤や小島が「やつる」「やつす」に「神性」や「呪性」を見出すのうなずける。なお、『源氏物語』全体の「やつる」の初例は、

伊予介のぼりぬ。まづ急ぎ参れり。舟路のしわざとて、すこし黒

みやつれたる旅姿、いとふつつかに心づきなし。

(「夕顔」巻 一四五頁)

と「交情の時空」などとはおよそ似つかわしくない無骨な受領に使われたもののだが、この伊予介が京都の文弱な貴族連中ではない、荒ぶる地方(例えば、舞台として設定されている十世紀の伊予では藤原純友の乱が起こっている)の雄々しく、禍々しいエネルギーを持っていると考えれば、確かにこの「やつる」も「神性」や「呪性」を持つ「まれびと」を表現した用例のうちに数えられよう。

とするならば、やはり男に「神性」を持つ「まれびと」という意味要素を付与することに使われたのが、第一部世界の「やつる」「やつす」だと考えられよう。「夕顔」巻における夕顔との邂逅と死別、そして「若紫」巻の冒頭、北山に向く光源氏に使われる「やつる」「やつす」は、まさに「まれびと」光源氏の姿を描いているのであった。

例えば、次のような場面である。

女、さしてその人と尋ね出でたまはねば、我も名のりをしたまはで、いとわりなくやつれたまひつつ、例ならず下り立ち歩きたまふはおろかに思されぬなるべしと見れば、わが馬をばたてまつりて、御供に走り歩く。(「夕顔」巻 一五一頁)

若い光源氏は、スリリングな恋を楽しんでいる。夕顔の正体が分からないことをいいことに、自分の正体も明かさない。帝の第二皇子という社会的身分を自ら隠して、ただの一人の男として夕顔と一夜を共にしようとする。そして、その源氏の「やつれ」が、本来出会うはずのなかった二人の関係を進展させていくのである。まさに小島の指摘する通り「交情の時空」が「やつれ」によって開かれているのであ

た。

なお、夕顔との出会いに際しては、その当初から「やつし」という語を見出すことができた。

御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰とか知らむとうちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへれば、門は薔のやうなる押し上げたる、見入れのほどなくものはかなき住まひを、あはれに、いづこかさしてと思ほしなせば、玉の台も同じことなり。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。

〔夕顔〕巻 一三五―一三六頁

車を「やつし」た光源氏。その源氏に「白き花」が微笑みかけてくる。白い夕顔の花は、その屋敷の女主人の象徴である。まさしく二人の恋は光源氏の「やつし」から始まったとみてよいのではないか。同じことは若紫との出会いにも言える。

峰高く、深き岩の中にぞ、聖入りゐたりける。登りたまひて、誰とも知らせたまはず、いといたうやつれたまへれど、しるき御さまなれば

〔若紫〕巻 二〇〇頁

光源氏は病を得ており、まだ回復しきっていない。この「やつれ」は略装にくわえて、その病明けの状態のことも指すのだろう。略装、病明けの体で、源氏はそれと知らずに若紫のいる北山に忍ぶ。そしてこの直後、光源氏は「あまりやつしけるかな」（二〇一頁）と自分の今の状態を恥ずかしがる風を見せるが、まさにそうした仰々しい身分とは対照的な「異装」の状態であって初めて若紫と源氏の邂逅は可能

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

だったのだし、かつ若紫を密かに屋敷へ引き取るという強引な結末も可能となったのであろう。

「やつる」「やつす」が、恋の始発に用いられるのはその二人だけではない。ほかに花散里との出会いの場面でも「何ばかりの御よそひなくうちやつして、御前などもなく、忍びて中川のほどおはし過ぐるに」（「花散里」巻 一五四頁）とあって身を「やつし」ていることがうかがわれるし、明石君のもとを初めて訪れた時も「いとかくやつれたるに侮らはしきにや」（「明石」巻 二五六頁）と「異装」を欠かしていない。これらの女君たちとの恋の発端部にも「やつる」「やつす」が用いられていることは見逃せまい。若い光源氏の恋は常にこうした「異装」とともにあったのである。

女との出会いだけではない。女との別れに際しても「やつる」が効果的に用いられている。

これは、いますこし濃やかなる夏の御直衣に、紅の艶やかなるひきかさねてやつれたまへるしも、見ても飽かぬ心地ぞする。

〔葵〕巻 五五頁

「昔にならひはべりにける御装ひも、月ごろはいとど涙に霧りふたがりて、色あひなく御覧ぜられはべらむと思ひたまふれど、今日ばかりはなほやつれさせたまへ」とて、いみじくし尽くしたまへるものども、また重ねて奉れたまへり。〔葵〕巻 七八頁

正妻である葵上と死別し、源氏は喪服に身を包んでいる。その様子が周りからは「見ても飽かぬ心地」と捉えられる（この捉えようは、「やつれ」でもなお、その人の魅力が減退しないという『伊勢物語』『うつほ物語』の「やつる」「やつす」と近いものがある）。後の用例では葵上の母、大宮は「今日ばかりはなほやつれさせたまへ」と、源

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

氏が「やつれ」る（「老婆が選んだ冴えない色合いの服を着る」ことを頼むのだが、これも「異装」した光源氏の美しさを知ってのことだろう。ある種の「神性」、神々しさを放ちながら光源氏は葵上との別れに沈んでいる。

同じことは、紫の上との別れの場面にも言える。

「位なき人は」とて、無紋の直衣、なかなかいとなつかしきを着たまひてうちやつれたまへる、いとめでたし。

（須磨）卷 一七三頁

紫の上と別れて須磨に下る光源氏は、すでに位を朝廷に返上しており、何の模様もない地味な直衣を着ている。その「やつれたまへる」姿が、語り手の女房から「いとめでたし」と評される。おそらく紫の上も同じ気持ちであっただろう。光源氏の「やつれ」がかくも美しいものであることを、この一文は物語っている。

このように第一部における「やつる」「やつす」は、時に『伊勢物語』『うつほ物語』的な用法を受け継ぎつつ、光源氏の女性たちとの出会いと別れを、時に美しく彩っていたと言える。

しかし、須磨流謫を境に光源氏に用いられた例は激減する。先に光源氏に用いられた例は二四例と述べたがその分布は極端で、「明石」巻までで二一例、「落標」――「藤裏葉」巻まではわずか三例しかない。その三例中二例が朝顔齋院への源氏の発話（あるいは手紙文）、一例は明石上が回想する源氏の姿である。明石から帰ってきて新たに展開されるものではない。つまり、光源氏が明石から戻り、政界の重鎮として腕を振るうようになると「やつる」「やつす」ことはなくなるのであり、「やつる」「やつす」は第一部の中でも特に須磨流謫以前の源氏を象徴する言葉と言えるのである。⁵

なお、「若菜上」巻以降の第二部で「やつる」「やつす」が源氏に用

いられる例が二例あるのだが、これについては次項で検討する。

五 第一部の用例を引き継ぐ「やつる」「やつす」

――六条院世界を崩壊させる「やつる」「やつす」

すでに第三項で、第二部世界以降における「やつる」「やつす」の一つの方向性を確認した。それは『伊勢物語』の用例を受け継いだ、女三宮から浮舟へと流れる「女の出家」の系譜であった。しかし『源氏物語』の第二部世界の「やつる」「やつす」は、それを象るだけに終わらない。男たちに用いられた時、そこから何が見えてくるのか。この点を本項では確認したい。

まずは第二部の光源氏に用いられた二例の用例から見よう。

薫物などに心を入れて暮らしたまふ。宵過ぐして、睦まじき人のかぎり、四五人ばかり、網代車の昔おぼえてやつれたるにて出でたまふ。

（「若菜上」巻 八〇頁）

光源氏は既に「六条の大殿」（七七頁）と呼ばれる重々しい身である。さらに、女三宮と結婚し、長年連れ添ってきた紫の上との関係には亀裂が生じている。

そのような重苦しい立場、状況だからと言うべきなのか。源氏は、兄朱雀院が出家し、かつての恋人朧月夜が一人住みに戻ったと聞いて「あるまじきことは思しながら、おほかたの御とぶらひにことつけて、あはれなるさまに常に聞こえたまふ」（七七頁）と、手紙のやり取りを再開してしまう。引用本文は彼が「やつれ」、つまりまさに「交情の時空に入るための一つの儀礼」である「異装」をして、朧月夜のところに向かう場面である。「薫物などに心を入れて」とあり、源氏のこの交情にかける思いの熱さが知られよう。

「今はじめたらむよりもめづらしくあはれにて、明けゆくもいと口惜しくて」(八二頁)と、物語はこの交情を語る。源氏の「異装」により「交情の時空」に入った二人は若かった頃を思い出すように求めあい、燃え上がるのだ。

しかし、「異装」をしても既に光源氏は須磨流謫以前の若き源氏ではない。この恋は何も発展がないばかりか「今や紫の上の不信を高め、彼自身の困難を増して、六条院の秩序の崩壊を促すものでしかない」ものであった。

神田龍身も次のように述べる。

それはいかほど燃えようとも、人生に疲れた厚化粧の中年カップルの退廃的な情事以外ではない。青春時代に回帰せんと焦れば焦るほどに、白々しい気分だけが残る。

神田の評は、この箇所「やつれ」の意味を説明しているとも言える。まさに「異装」を用いて女たちと関係を構築していった「青春時代に回帰」しようとしつつ、結局は白々しさしか残らない。そのような中年、光源氏の虚しい有様が第一部世界、特に須磨流謫以前に多用された「やつる」「やつす」の情景を踏まえて、描き出されているのである。

もう一例の「やつす」は、光源氏の最晩年「幻」巻に見える。

みづからの御直衣も、色は世の常なれど、ことさらにやつして、無紋を奉れり。御しつらひなども、いとおそかに事をきて、さびしくもの心細げにしめやかなれば、
(「幻」五三〇頁)

最愛の紫の上と死別し、光源氏は失意に沈んでいる。想起されるのは、前項で引用した「須磨」巻での紫の上との生き別れの場面である。

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

そこでも光源氏は「無紋の直衣」を着て、それが「いとめでたし」とされていた。今回も同じ紫の上との別れ。だが、生別と死別という決定的な違いがある。紫の上を傷つけたまま、もう二度と関係修復はできない。「須磨」巻との残酷な対称性が「やつし」の語によって、鮮やかに見えてくるのである。この「やつし」もまた、第一部の「やつし」を踏まえて使われていると考えるべきであろう。取り返しのつかない後悔と寂しさに苛まれるこの男の最後の「やつし」は、最愛の女性のためになされたものだった。もう彼女との「交情の時空」が現世で開かれることはないのだが。

また、特に第一部世界で若き光源氏を彩った「異装」が、第二部では光源氏世界を崩壊させるものとして使われていることも見逃すべきではない。先に見た臘月夜との交情で使われた「異装」は一種の自爆行為だが、それにくわえてまた別の男に用いられた例があるので、引用する。

いかにいかにと日々に責められ困じて、さるべきをりうかがひつけて、消息しおこせたり。喜びながら、いみじくやつれ忍びておはしぬ。
(「若菜上」二二二頁)

柏木は女三宮の侍女、小侍従を「いかにいかに」と責め立て、「いみじくやつれ」た姿で女三宮との交情を果たす。この交情により後の薫が生まれ、六条院世界の崩壊が決定的になることを思えば、決定的な場面と言える。この邂逅を切り開いたのも「やつれ」であった。柏木も一瞬だけであったが、この「異装」によって、色好みのヒーローとなり得たのである。旧時代のヒーローである光源氏に立ち向かい、女を勝ち取る。結局、柏木はその後まもなく敗死することになるが、光源氏世界(六条院世界)の崩壊だけは果たしたと言える。光源氏はその「異装」によって紫の上、花散里、明石君といった女性たちと

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

交情の時空を切り開き、六条院世界を華々しく構築したわけだが、次世代の男(柏木)の「異装」によって、その世界は完全に崩壊していくのであった。

むずびにかえて

ここまで、本論は『源氏物語』における「やつる」「やつす」の用いられ方、機能について確認してきた。男をヒーローたらしめる「異装」を意味するとともに、女の人生における最終手段、「出家」を意味する、非常に興味深い言葉であったと言える。『源氏物語』が『伊勢物語』や『うつは物語』の用例から適宜学びつつも新たな意味合いを持たせ、この言葉に重いモチーフを託していたことが見えてきたと思う。そして、『源氏物語』における「やつる」「やつす」の興味深い用例は特に『夜の寝覚』によって継承され、男女主人公それぞれの生の実相を描く際に用いられていたことも確認できた。

最後に、もう一度『源氏物語』における「やつる」「やつす」の使用状況を物語展開に沿って大枠で確認するならば、次のようになるだろう。つまり、当初はもっぱら光源氏が交情空間——特に紫の上や明石君など、六条院世界を構築する女君との交情——に入る際に使われたが、しかし(六条院が完成した)第二部では、光源氏の玉鬘との交情、あるいは柏木の女三宮との交情の場面に用いられ、六条院世界崩壊の流れを作り出し、かつ決定づけている、と。最後に「幻」巻で(かつての生き別れの場面を踏まえながら)二度と会えない紫の上を思っ「やつす」光源氏の姿は、『源氏物語』正編が行きついた結末であった。光源氏の栄光と没落の姿を「やつる」「やつす」は描きとっている。見方を変えれば、物語が光源氏の光と影を「やつる」「やつす」という語に託して表現したとも言えよう。

また、同時並行的に「やつる」「やつす」は女三宮の出家を描くも

のとしても用いられていた。柏木(男)の「異装」と女三宮(女)の「出家」は結節点となって、一つの流れの中にある。柏木の「やつし」で女三宮の「やつし」が引き起こされる。そして、その「やつし」は出家できない女、紫の上の問題を掘り起こす。第三部(統編)の浮舟、そして『夜の寝覚』の寝覚の上へとその問題は引き継がれていくことになるだろう。『源氏物語』は『伊勢物語』を継承して女の出家を描き、かつそれを大きなテーマとして、第二部、第三部の長いスパンで扱った。それを支えたのが「やつる」「やつす」であり、『夜の寝覚』はそのことを踏まえて「やつせ」ない女、寝覚の上を造形したのであった。

なお、『源氏物語』第三部では薫、匂宮の両名にも「やつる」が使われている。今ここで彼らの「異装」について詳述する用意はないが、神野藤が指摘するように「薫は身を(やつす)ことによって、俗なる都世界とは異なる世界の女との恋が可能になった」と考えるならば、やはり第一部の世界で用いられた「異装」としての用法がまずは基本にあると考えていいように思われる。その用法を踏まえつつも、新たに「宇治」という異郷での恋に用いることで意味はずらされ、そこに新たな機能、用法が付与されてくる。第三部の男たちに使われた用例については、ひとまずそのように考えておきたい。『源氏物語』における「物語取り」や「ずらし」を考える手がかりとしても、「やつる」「やつす」は興味深い問題をはらんでいると言えるだろう。

ともあれ「やつる」「やつす」は『源氏物語』全編を貫き、物語の主要展開(特に六条院世界の構築と崩壊)や大きなテーマ(例えば「女と出家」)に非常に深くかかわっている。計算のうえ意図的、計画的に使用された言葉と考えて間違いないのではないか。改めて『源氏物語』におけるこの語の持つ意味、意義の大きさがうかがい知れるのである。

注

- (1) 神野藤昭夫『源氏物語』の表現方法としての「やつる」〈ややつす〉考——異装・交通・時空——『源氏物語の思惟と表現』一九七七年 新典社
- (2) 小島繁一「源氏物語交情の時空とその変容——やつし、まどひ、あけぐれ」『同志社国文学』二二 一九八二年十二月
- (3) 代表的なところでは宮下雅恵「夜の寢覚」の男主人公再説——物語史のために——『夜の寢覚論（奉仕）する源氏物語』二〇一一年 青簡社 初出は二〇〇八年
- (4) なお、女三宮の「やつる」については、柏木が小侍従に女三宮への手引きをたのむ場面で「ただ、一言、物越しにて聞こえ知らすばかりは、何ばかりの御身のやつれにかはあらん」（『若菜下』二二頁）とあり、この用例も見逃せない。本当に物越しでの応答で済めば女三宮は「やつる」（出家する）ことはなかった。逆説的に彼はこの後、自分がすること、そしてそれが引き起こすことを言い当てているのである。この「御身のやつれ」という語が後の「やつれ」＝「出家」を導く伏線と考えれば、これもまた巧みな計算の上で用いられた言葉ということになるだろう。
- (5) 作家の橋本治は「かなわぬ恋に揺さぶられて光源氏が女性遍歴を繰り返す」という話は、『須磨・明石』で一区切りがつく」と述べたが（『その後の光源氏の物語』『新編日本古典文学全集 源氏物語 四』月報 一九九六年十月 小学館）、その言を借りれば「光源氏が女性遍歴を繰り返す」話に「やつる」「やつす」が多用されているということになる。須磨流謫は光源氏の人生における一つのターニングポイントなわけだが、「やつる」「やつす」の用例分布もそのことを証明していると言える。

『源氏物語』における「やつる」「やつす」

- (6) 『新編日本古典文学全集 源氏物語 四』八六頁 頭注
- (7) 神田龍身「光源氏の物語から宇治十帖へ」『源氏物語』性の迷宮へ』二〇〇一年 講談社
- (8) 同じく侍女（王命婦）を「責め歩」（『若紫』二三頁）いて交情に及んだ光源氏の執念深い姿が、この柏木には重ね合わせられているように思える。藤壺との初回の交情は現存本には描かれないうが、そこには恋に身を「やつし」た光源氏が描かれていたのではないかと想像したくなる。
- (9) 注（1）論文に同じ。

プロフィール

東海学園大学人文学部准教授。専門は王朝物語文学。著書に『夜の寢覚』から読む物語文学史（二〇二〇 新典社）などがある。